

裸麦よもやま話-古代編-

麦は、いつから〔mugi むぎ〕と呼ばれ、〔麦〕の字は、いつごろ出来たのでしょうか。史書には麦に関する記述が少なく、その由来や伝播については不明な部分が多く残されています。そこで、裸麦を中心にその起源や麦の字が表わす意味、史書や遺跡で発掘された麦など、麦の古代史を訪ねてみます。

〔麦の起源〕

いわゆる中近東といわれるペルシャ湾岸地域は、かつては肥沃三日月地帯と言われ、農耕の発祥地ともされています。中でも、イラク北部の遺跡からは紀元前 6750 年の二条大麦が発見され、チグリス・ユーフラテスの遺跡では紀元前 5000 年の六条大麦が見つかり、小アジア中部からは紀元前 5600 年の裸麦が確認されています。

麦の起源については諸説ありますが、最初に二条大麦の野生種から栽培種が生まれ、その後、六条大麦や裸麦に進化したとの見方が有力とされています。

野生種は成熟すると穂から麦粒が容易にはずれ、粒は細く小さく、風で遠くへ飛ばされるように長く大きな芒(のぎ)をもっています。しかし、栽培種は食料になる麦粒が太く大きく、収穫時に穂から麦粒が落ちないように、はずれ難くくなっています。この麦粒のはずれ易さは、二つの優性遺伝子が関係しているため、その遺伝子タイプで系統の違いや地域の広がり具合が調べられています。

それによると、大麦や裸麦は紀元前 4200 年から 2500 年にかけて肥沃三日月地帯からヨーロッパに伝わり、東アジアには少し遅れて紀元前 3000 年頃に伝わったと考えられています。その後、中国や韓国に広がり、日本には縄文時代後期から弥生時代の前期に九州へ伝わったとされています。縄文時代であれば、コメより早く日本に入ってきた可能性があるのです。

〔麦の語源〕

中国や日本の史書にでてくる「麥(むぎ)」は麦の旧字であり、この字を上下に分けると「來」と「攴」になります。

このうち「來」の字は、麦を表わす中国の甲骨文字(こうこつもじ)から生まれ、「攴」の字は向こうから来る、或いは上から降ることを意味しています。二つの字が合体して「麥」になった背景には、麦踏みをする姿を模したとする説や、西方から良い麦種(むぎだね)が伝わり古代周王朝が興隆したことを表わすとする説、麦が年を越して稔ることから来た説などがあります。

甲骨文字は、亀の甲羅や牛・馬・鹿などの動物の骨、まれに人の頭蓋骨に刻まれた文字であり、紀元前 1500 年の殷の時代に古くに用いられた原始文字です。文字が生まれた頃から、麦を表わす字があったのは、それだけ麦が人々にとって大事な食糧だったということです。

ついで、紀元前 1050 年から始まる周の時代に原始的な漢字「金文」が成立し、その周王朝の初代王には「我に來牟(らいぼう)を胎る」とする伝承が残されています。

牟(ぼう)とは、芒(のぎ)、すなわち麦穂にみられる細長いヒゲのことをさし、麦を表わします。

來(らい)とは、殷の時代には麦を表しますが、周の時代には「來(くる)」に転じます。

このため、甲骨文字の來(むぎ)と攴(くる)が、原始的な漢字では牟(むぎ)と來(くる)に変化し、周王の伝承を交えると、「來牟(らいぼう)」とは西方から良い麦の種子がやって来たことを表わします。

むぎの字は、殷の時代では「來」、周の時代には「牟」となり、その後、來(むぎ)と攴(くる)が合体して「麥」になり、今の「麦」に変化するのです。

〔麦からきた来年〕

漢字の故郷である古代中国の華北地方では、冬至から翌年の冬至までを農耕の一年としていました。年間を通じて最も日が短い 12 月 22 日を一年の計にしたのです。ちなみに、日本の大寒や立春、春分や夏至などの二十四節気も冬至と同様に、農作業の暦(こよみ)をルーツに持っています。

その華北地方では、冬至にはほとんどの作物が種まきから収穫までを終えますが、ただ麦だけは冬

至の前に種を播き、冬至を越して収穫される農耕暦を超える作物でした。そのため麦といえ、次の年を意味するようになったのです。

「來」は、原始漢字では「来(くる)」ですが、もともとは麦を表わす字です。また、「禾(いね)」と「千(はらむ)」が合体して「年」の字が生まれます。來と年で「来年」の熟語ができますが、麦が実る年から次の年を意味するようになったとも言われます。漢字には意味があるものです。

〔中国の裸麦〕

齊民要術(さいみんようじゅつ)は、古事記が編纂される200年ほど前の紀元530年に、中国で書かれた農学書です。齊民とは一般の人々を指し、要術は心得帳のようなもの。農作物の栽培から食品加工の分野まで幅広く網羅された書物で、国立国会図書館に所蔵されているので、今ではインターネットでみることもできます。

大小麥第十の項に、原典となった史書の「爾雅(じが)」では大麥(おおむぎ)のことを麩、小麥のことを稂と注釈を加えた上で、「五穀の長である大麥は、今の裸麥(はだかむぎ)のことで麩麥ともいう。また、穞麥(えんぱく)には皮があり、最近では馬に食わせているが、大麥と穞麥(えんぱく)とは種類も名前も違うのに、世の人々は混同している」と書かれています。

驚いたことに6世紀の中国ではすでに、大麥や裸麥、麩麥、小麥、穞麥など、いまの大麥や裸麦、小麦、燕麦にあたる麦の種類と名称がそろっています。また、五穀の長である大麥は最近では裸麦のことといい、華北地域では裸麦が盛んに栽培され、裸麦が大麥と呼ばれていたことも分かります。

この齊民要術が書かれた紀元530年頃とは、日本で聖徳太子が登場する時代であり、卑弥呼(ひみこ)が親魏和王(しんぎわおう)の称号を贈られてから300年ほど後の時代になります。

〔古事記の牟義〕

古事記(712)は日本にのこる最も古い歴史書ですが、なかに麦が登場します。須佐之男命(すさのおのみこと)に殺められた大氣津比賣神(おおげつひめ)の体から、稲や大豆、小豆などともに「麥」が生まれた記述がみられます。

成形成説(1804)によれば、古事記には麥を「牟義(むぎ)」と書かれた注が残されています。「麥」ではなく「牟義」と書かれていたかどうかは、古事記に原本が残っていないので分かりませんが、牟義であれば「mugi むぎ」という音を表わした当て字だったかもしれません。

というのも漢字の意味に関係なく、音だけを充てた万葉仮名が日本語の成立以前にあったからです。本草和名(918)や和名類聚抄(938)、延喜式に見られる於保牟義(おおむぎ)や布止牟岐(ふとむぎ)、古牟岐(こむぎ)、加知加多(かちかた)などもその類です。

古代から「mugi むぎ」と呼ばれた作物があつて、その呼び名を文字で表わす際に、牟義や牟岐が使われたのでしょうが、漢字の祖国では「牟」の字が麦を表わすだけに、「む」という音だけで採用されたとは思にくいのです。

ところで、人々はその穀物をなぜ「mugi むぎ」と呼んだのでしょうか。

むぎは古代中国で麦をさす「むく・ぎ」が日本に入って略されて「むぎ」になったという説があります。また、日本の古語では「む」は長いを意味し、「ぎ」は芒(のぎ)をさし、長い芒を持った穀物を「むぎ」と呼んだという説。ほかに、皮を剥(む)いて食べることから「むぎ」と呼ばれた説もあります。

いずれも、もっともな理由ですが、漢字と一緒に呼び名が伝わったのではなく、古くから「mugi むぎ」と呼ばれる作物が日本にあったことを連想させる話です。

〔遺跡にみる裸麦〕

日本でいつ頃から「むぎ」が栽培されていたかを知るには、遺跡の発掘調査で見つかる炭化麦が大きな手掛かりになります。麦は土器などの底に炭化した状態で残っているため、その形状から大麥と裸麦に鑑別されており、次に示してみます。

- 縄文時代後期の福岡県四箇遺跡から出土した麦は、裸麦であること。
- 紀元前300～100年の弥生前期、横浜市の遺跡から出土した麦は、裸麦と大麥であること。
- 紀元100～300年の弥生後期、東京都の遺跡から出土した麦は、大麥であること。
- 紀元300年からの古墳時代、山口県の遺跡から出土した麦は、裸麦であること。

○紀元 710 年からの奈良・平安時代、千葉県の遺跡から出土した麦は大麦であり、埼玉県と和歌山県の遺跡から出土した麦は裸麦であること。また、岡山県の遺跡から出土した麦は裸麦と大麦であること。

九州で裸麦が見つかった縄文後期といえ、紀元前 1,000 年から同 300 年頃まで。中国では周の時代にあたります。九州で稲作が始まったのは紀元前 300 年頃ですから、裸麦はそれより以前に九州へ伝わり、大麦と共に関東まで広がったと考えられます。

日本における麦の歴史が裸麦から始まったとすれば、愛媛の麦は 2000 年以上の歴史を持っていることになり、その歴史の重みが愛媛の裸麦を支えているのかもしれない。

(愛媛県農林水産研究所 HP [ike](#))